

## 史料紹介

### 梶山季之が編集した『スクリーンひろしま』

小 田 和 美

#### はじめに

作家・梶山季之(一九三〇年一月二日～一九七五年五月一日)が、広島高等師範学校在学中に発行にかかわった幻の映画雑誌『スクリーンひろしま』が見つかった。

この雑誌の存在は、梶山と広島高師の同級であり、同人誌『天邪鬼』の仲間でもあった坂田稔氏が梶山没直後に著した追悼文「出逢いと別れ」<sup>1)</sup>で『天邪鬼』を出す前に、彼と『スクリーンひろしま』という映画雑誌を出したことがある<sup>2)</sup>、しかし『財政が続かず一号でつぶれてしまった』と紹介していた。

『スクリーンひろしま』は、戦後初の広島の映画雑誌と言われ、一九四九年(昭和二四)五月に同人組織で発行、梶山季之も同人に加わっていたと伝わっている<sup>2)</sup>。しかし、現物が残っておらず、内容や梶山の関わり方も不明だった。

そこで発行時期から考えて、プラランゲ文庫に当たったところ、国会図書館プラランゲ文庫のマイクロフィルムによって冊子の全容を知ること

とができた。また、マイクロフィルムでは分からない冊子のサイズや色は、坂田稔氏からご教示を得ることができた。

冊子内には、梶山季之の署名記事「映画の知識・テクニカラー映画に就いて」と、梶山執筆と推測される「映画館めぐり・東洋座(広島)」がある。この二文を紹介し、また梶山と映画との関係について考察した。

#### 凡例

- 一、仮名づかいは原文のまま、字体は常用漢字、人名用漢字は表記通りの字体を使用した。
- 一、引用部分は『』で示し、出典は後記した。本題である『スクリーンひろしま』を引用した部分には特に出典を示していない。
- 一、引用史料二点は、原文に合わせた横書き表記で最終頁に掲載した。

## 一 『スクリーンひろしま』の構成と内容

### (一) 形態

一二頁編成、横書き本文、左開き、表紙背文字入り、旧漢字使用。坂田氏の記憶では、冊子のサイズは、A五判(二四八×二一〇ミリ)程度。そのサイズで測ると、最も小さい活字(裏表紙の監督や俳優名)が五・五ポイント(八級)、逆にその活字が最小五ポイント(七級)とすると、冊子サイズは一回り小さいB六判(二二八×一八二ミリ)となり、このどちらかであったと考えられる。また、本文は一色。表紙のみ二色刷りで、表紙のタイトル文字バックがピンク色ではなかったかという。<sup>3)</sup>

### (二) 頁構成

- 第一頁(表紙) タイトル文字・スクリーンひろしま SCREEN  
HIROSHIMA No.1、写真・女優イングリット・バーグマン
- 第二頁 「懸賞募集・生きている似顔」―バーグマン・月岡千秋・池辺良に似ている人を募集、「創刊の言葉・川西恒夫」、「撮影所便り」―東宝・大映京都・松竹大船で制作撮影中映画の紹介
- 第三頁 「スター伝記(1) ベティ・デヴィス」、広告・松竹座
- 第四頁 「映画の知識・テクニカラー映画に就いて・梶山季之」、「撮は誰でせう」、広告・東洋座

第五頁 「くりごと・高木善次」、「名士映画インタビュー 好きな俳優と映画・濱井市長、筒井女史」、広告・太陽館

第六頁 「監督プロフィール・山本嘉次郎」、「アメリカ映画の郷愁・芥川壽夫」、広告・福屋名画劇場

第七頁 「話の泉」スタヂオ紹介(A)・大映株式会社 京都撮影所、広告・国際劇場

第八頁 映画紹介「花婿三段跳び」「アラスカ珍道中」、広告・銀座東宝劇場

第九頁 映画紹介「流星」「地下街の弾痕」、「お願ひ!」―読者欄予告、広告・広島劇場

第一〇頁 映画紹介「哀愁」、「映画館めぐり・東洋座(広島)・(K)」、広告・日本劇場

第一二頁 五月の封切映画スケジュール、私は誰でせう・話の泉回

答、奥書(編集同人・発行日・発行所・印刷所)

第一二頁(裏表紙) 「五月の推薦映画」「アメリカ映画・二重生活」「欧州映画・幻想交響楽」「日本映画・森の石松」

### (三) 奥付

- 昭和二四年五月一日発行  
発行所 広島市紙屋町三四  
スクリーンひろしま出版社
- 定価 一〇円  
編集人 川西恒夫

印刷所 広島市紙屋町三四

廣榮印刷株式会社

印刷人 木村智郎

(四) 編集同人

編集同人には梶山を含めて八人の氏名がある。氏名のみのは、掲示だが、プランゲ文庫雑誌検索データベースから当時の肩書きや執筆物を加えると、掲載順に次のようになる。(一)内は検索出典。

川西恒夫 中国新聞社整理次長(『芸備教育』第一号、一九四八年七月一日発行に「東宝争議の反省」執筆)

芥川壽夫 中国新聞整理部長・映画批評担当(『労働』第三号、一九四七年一月二〇日発行、『読物中国』第四卷第六号一九四九年七月一日発行に「続日本映画貧弱物語」執筆)

高木善次 (『善次』では見当たらないが、「高木善治」では、『読物中国』第四卷第六号、一九四九年七月一日発行に「浪曲一代男」の挿絵担当)

福原信夫 広島中央放送局音楽係(『教育音楽』第四卷第二号、一九四九年二月一日発行)

菅近芳孝 中国新聞社事業部長(『ライト』第八号、一九四七年六月一日発行)

高尾弘暉 デザイナー、雑誌カット・表紙絵担当(『弘暉』では見当たらないが、「高尾弘輝」では、『郷友』第二卷第

七号、一九四七年九月一日発行など)

紺野耕一 中国新聞社員・洋画家(『芸備教育』第九号、一九四八年三月一五日発行)

梶山季之

広島高師二年生の梶山以外は、映画・音楽・絵画などの分野で広島の指導的立場にあった社会人であり、中国新聞社の社員が四人いる。

坂田氏の記憶では、『実際は梶山と僕の二人で作った』《表紙のイングリット・バーグマンは僕の趣味だった》そうだが《労働組合で売ってやるとのことだった》<sup>4)</sup>ために、販売戦略として中国新聞社関係者や文化人の名を編集同人に入れたのかもしれない。

また奥書によると、冊子と同名の会社から発行している。簡単な届けで会社の設立ができた時代だが、印刷所と同じ所在地から考えると、印刷所に看板を掲げただけかもしれない。これは当時は珍しくなかったし、この三年後に梶山・坂田が出版した作品集『買っちゃんね』<sup>5)</sup>の発行所・文芸思潮社も会社の実態はなかったという。<sup>6)</sup>

二 広島市の映画事情

冊子が発行された一九四九年に広島市内にあった映画館二〇館<sup>6)</sup>のうち、「五月の封切映画スケジュール」にある映画館は一一館。このうち東洋座と太陽館がアメリカ映画、福屋名劇と日本劇場が欧州映画、他七館が日本映画(東宝系三館、松竹系二館、大映系二館)である。また立地地域は、広島市内の荒神町・的場町・堀川町・八丁堀であり、

宇品の港劇場と、横川の旭劇場は入っていない。これらから考えると『スクリーンひろしま』は、広島市を中心にした地域の映画ファンを対象にした月刊誌の予定であったと考えられる。

当時の映画上映は、火曜日から翌月曜日までの一週間単位で、封切日から前日の新聞に上映広告が出るのが通例だった。中国新聞では広島市一三館、呉市四館、時には尾道、岩国の映画館の上映広告も並び、ほとんどの人が新聞で上映映画を知ることができた。このため映画情報誌は、映画ファン向けの情報で勝負する必要があった。

川西恒夫編集人は「創刊の言葉」で、『三十種以上にのぼる映画雑誌があるなかで、新聞の全国紙と地方紙のように《郷土文化の向上にいさゝかなりとも寄与するためには映画雑誌のローカル版があつてもいゝ》との意気込みを語るが、商業的に成り立つ見込みがあつての発刊だったのか、それとも梶山たち若い者の熱意に引きずられてのことだったのか。

当時の映画館入場料は冊子にある東洋座の「哀愁」封切が七〇円<sup>7</sup>。前年三月の東洋座開館封切映画「アンナとシャム王」の入場料三五円<sup>8</sup>が既に二倍になっているインフレとはいえ、一二頁編成で定価一〇円は、割高感が否めない。さらに上映スケジュールを当時の新聞広告と比べると、封切日がずれていたり、月の後半は違う映画がかかったりして、月刊予告が難しかった事情が伺える。『スクリーンひろしま』は、時期尚早だったとも言える。

その後の広島発の映画雑誌は、四年後一九五三年九月に『映画手帖』が二一館の上映予告を掲載して無料配布で発刊、三号（十一月号）か

ら定価一〇円で一万部を発行、のちの『月刊レジャー広島』と合わせて通算五〇年継続したが、映画全盛期の昭和三〇年代前半に追随したその他の映画雑誌はことごとく短命に終わった。<sup>9</sup>

### 三 記事「映画館めぐり」

巻末に掲載した「映画館めぐり・東洋座（広島）」は（K）の署名の覆面記事だが、後年の梶山を思わせる取材記事で、坂田氏も文体から梶山であろうと言われる。<sup>10</sup>確かに署名記事の「テクニカラー映画に就いて」（本文七一五字）よりも、「映画館めぐり」のほうが、後年のトップ屋時代の梶山を彷彿とさせる。

本文二四三字。短い字数で、映画館の豪華さ、新鋭映写機とベテラン技術者、宣伝部の人材などを手際よく紹介する歯切れのよい文。また座席数や売上額も押さえながら、支配人の「中国一の映画館」との自慢を裏打ちするゆつたりした映画館の雰囲気も伝えている。

この東洋座は、『一千万円の巨費を投じて』前年三月二六日に米画専門館として華々しく開館した。<sup>11</sup>写真つき「映画館めぐり」記事は開館から一年あまり後の隆盛ぶりを伝えているが、この年の一月二八日に火事で全焼したため、紹介された館の様子は、貴重な記録となった。

### 四 梶山季之と映画

映画館・東洋座の三階サロンは、焼失まで、広島ペン・クラブ

(一九四九年四月八日創立)の設立準備会や設立後の役員常会の場として使われ、ペンクラブ事務局を担当していた中国新聞の金井利博記者が、東洋座に行く機会は多かった。<sup>13)</sup>この後間もなく、梶山もペンクラブの事務局を手伝うようになり、金井氏とも強い信頼関係で交友を続ける関係になっていくが、『スクリーンひろしま』がきっかけの一つになったとの推測も成り立つ。

同様に、編集同人の芥川壽夫や紺野耕一など中国新聞社関係者、紙面に登場した筒井綾子洋裁女学院長など、その後の同人誌『天邪鬼』や『広島文学』に様々な形で関与する人物が既に登場している点も、梶山が築いた人脈の一端として注目される。

また、梶山作品では、高師在学中の短編映画シナリオ「月夜」<sup>14)</sup>や、映画館の入場者数調査(税務署雇い)のアルバイト体験を題材にした短編小説「幻聴のある風景」(初出『新思潮』一五号、一九五六年一月発行)に映画知識が反映している。

さらに、長編小説「虹を掴む」(初出『婦人画報』一九六四年九月号〜六五年一二月号連載)では、移動映画を携えて農村を回った高師時代の体験を始め、映画配給、映画館経営、海外映画祭など、日本映画界の戦後の復興と隆盛を時代背景にして、映画界で活躍・成長していく快男児を描いた作品となっている。

一号雑誌に終わった『スクリーンひろしま』だが、坂田氏はこの頃の梶山に《人の意表をつくアイデアや、スケールの大きい企画力、しかも臆しないで実行する活動力》があり、《事業家的なもの》を感じたと回想している。<sup>15)</sup>翌年に創刊した同人誌『天邪鬼』を始め、商業的

に成り立つ同人雑誌発行を目指していた梶山にとって、雑誌の編集・出版と販売まで手がけた経験は、その後の活動に活かされたはずである。

梶山季之の作品については、美那江夫人が編集した『積乱雲 梶山季之―その軌跡と周辺』(梶山美那江編集、季節社発行、一九九八年二月)の中に、「仕事の年譜・年譜の行間」として、一九四八年以降の作品名・初出掲載誌紙・発行時期・原稿枚数が完璧に近くまとめられている。その「年譜」で唯一作品が空白となっていた一九四九年の執筆となる『スクリーンひろしま』は、一九歳の高師生・梶山季之を捉える参考になるだろう。

#### 出典

- (1) 坂田稔「出逢いと別れ」三土会・梶山グループ編『積乱雲とともに―梶山季之追悼文集』二二―二四頁、季節社、東京、一九八一年五月一日。初出・安藝文学同人会編『安藝文学』三九号、一九七五年九月二五日。
- (2) 「広島映画街激動の五十年」(株)広島映画手帖社『月刊レジャー広島』通巻五九〇号―三頁、二〇〇二年九月号参照。
- (3) 坂田稔氏より筆者宛二〇〇九年六月二二日消印葉書による。
- (4) 二〇〇九年五月三一日筆者と坂田氏との電話による。なおこの電話は、梶山美那江氏の仲介による。
- (5) 中国新聞一九五九年一月二五日付六面「物語 戦後・広島芸芸史

- 三八」では、発行所・文芸思潮社の住所を「東京・尚志会館内」としながら、印刷人の名は広島刑務所内印刷所代表者であることを指摘し、「こんな発行所はもちろんありはしない」《梶山好みの「神秘捏造」というヤツである》としている。
- (6) 広島県勢要覧。
- (7) 中国新聞一九四九年五月二日付二面広告。
- (8) 中国新聞一九四八年三月二五日付二面東洋座竣工広告。
- (9) 久村敬夫『ヒロシママガジン・日本最長寿タウン誌の軌跡』一八一頁、(株)ザメディアジョン、広島、二〇〇八年八月。
- (10) 前掲坂田稔氏より筆者宛葉書。
- (11) 中国新聞一九四八年三月二八日付二面記事。
- (12) 中国新聞一九四九年二月九日付二面。記事によると、一二月八日未明に東洋座二階グリルから出火、設備機材を含む二〇〇坪全館を焼失、福屋百貨店の隣接壁面損壊、東向かいの中央マーケット一棟三〇〇坪なども類焼し、損害額約四千万円の大火となった。
- (13) 「広島ベン・クラブ昭和廿五年度定期総会資料」、広島大学文書館所蔵「平和学術文庫・金井資料」。
- (14) 梶山季之の『ジャマー・コンタクト』四九〜五九頁、(株)季節社、東京、一九九一年六月一五日。初出・広島高等師範学校国語国文学会編『振鈴』第三号、一九五〇年三月。
- (15) 前掲「出逢いと別れ」。(おだ たかみ・広島大学文書館事務補佐員)



『スクリーンひろしま』表紙

史料①

映画の知識

テクニカラー映画に就いて

梶山季之

戦後日本にヘンリイ五世、石の花、シベリヤ物語などの天然色映画が輸入、上映されたが、我々がこれらの天然色映画を見て感じたのは、この天然色映画が従来の黑白映画にとつて代つて映画の主流をなすであろうという事であつた。

アメリカなどでは、新作の長篇十本のうち五本迄が天然色であり、漫画は全部天然色という華やかさだ。ソ連も近頃しきりに製作しているが、近く封切られる「せむしのこま」そしてY・ライズマン監督の「汽車は東へ行く」と云う二本が天然色である。

天然色映画の最初のもは、1895年頃からフランスで発表され始めた。これは一駒一駒を丹念に手で染めたので、手染法と呼ばれている。次に、切抜の型を当て、着色する型染法が採用された。

しかし、これらは、誠に原始的な方法で、全くお粗末なものであつた。1908年に英国で、レンズの前に赤と青の画像を視覚的に重ね合はせるキネマカラーが発表されて以来、或いは光学的に天然色を再現する各種の方法が各国で発明、発表された。だがその中でも、一番発達し精密的、総合的に育て、来たのは、やはりアメリカであつた。

1918年以来、研究と改良を重ねて完成された現在のテクニカラーは映画技術の最高を誇

るものであるといつても過言ではあるまい。

始めの頃の赤、青の二原色を基礎にした方法では、色彩感を十分に満足させる様な効果を出す事は到底出来なかつたのだが、1932年に三原色方法として面目を一新し、その後も改良と進歩を加えて来たので、その素晴らしさは大したものである。

現在の日本に於ては経済的或いは技術的な問題から天然色映画を製作する事は望めまい。『新妻会議』でパート天然色が始めて試みられたが、とても暗い感じのものであつた。

【注】原文は旧漢字を使用。

史料②

映画館めぐり 東洋座(広島)

『なんといつても中国一の映画館はうちだよ』と檜垣支配人の鼻息は荒い、なるほど切符を買つて正面の階段を昇り、広々としたロビーで『ピース』でも喫つて開幕のベルで椅子につきスマートなハリウッド調にほゝえむのもオツなもの、階下900、階上300、それにスペシャルルーム32の椅子席。映写機はニツセイK8型の新鋭を大久保、大谷のベテランが装作するだけあつて映写効果は満点。宣伝部のスタッフは元セントラル名古屋支社で快腕をふるつた稲富、巢守の両氏。こゝの一ヶ月の興収平均150万円も中国一だそうだ。

……………(K)

【注】原文は旧漢字を使用。